『クリオ』15号（2001年）67-72頁

南仏留学報告（1999年から2001年まで）

工藤 晶人

南仏の小都市エクスアンプロヴァンスにあるプロヴァンス大学に留学して二年が過ぎようとしています。今回『クリオ』編集部から留学報告を書くようにとの提案をいただきました。私の留学生活はまだ道半ばですが、以下、おおまかな中間報告とします。

留学準備

はじめに私がこちらに留学するまでの経緯をまとめます。博士課程進学後留学を幾分まじめに検討しだした私が最初に考えねばならなかったのが、留学先の選定でした。フランスに留学する場合、おおまかな選択肢としては、大学とそのほかの研究機関（社会科学高等研究院 E.H.E.S.S.や政治学院 I.E.P.）のふたつの可能性がありますし、パリか地方かという選択もせねばなりません。専門を同じくする研究者集団の存在、史料や文献へのアクセス、日常生活の問題など、勉学の環境としてそれぞれにメリット・デメリットがあることは言うまでもありません。

パリを含めてフランスの主な都市には、かつての学部から再編された複数の大学からなる大学群が設置されています。たとえばエクスアンプロヴァンスとマルセイユを拠点とする大学群には三つの大学が含まれていて、プロヴァンス大学（エクス・マルセイユ第一大学）は、そのうちの文学部に相当します。私がプロヴァンス大学を選択したのは、何よりも史料のそばに行くことを優先しようという思いからでした。エクスアンプロヴァンスには国立文書館海外部門分館（Centre des Archives d'Outre-mer）が設置されていて、私の研究課題である植民地期アルジェリアに関する史料の大部分が所蔵されていることがその理由です。史料がある街には研究体制も整っているだろうという予想は、結果として裏切られることはありませんでした。この点については後述します。

日本からフランスへ学位取得を目的として留学する場合、事務的な作業にそれなりの手間がかかります。悪名高いフランスの大学事務の効率の悪さがその理由の一つです。また、学位制度の違いも考慮せねばなりません。参考までに示せば、バカロレア（大学入学資格）取得後のフランスの高等教育課程は、二年間の第一期課程（大学一般課程修了免状 D.E.U.G.）、二年間の第二期課程（学士 licence ついで修士 maîtrise）、四年間の第三期課程（D.E.A.ついで新課程博士 Nouveau doctorat）とつながっています。

日本から研究目的で留学する場合、私のケースもふくめてもっとも多いのが、第三期課程の一年目にあたる D.E.A.に登録する方法でしょう。この場合、日本の修士号とフランスの maîtrise との同等性を認証させることが条件になります。これはたいていは学位の翻訳の提出程度ですむようです。また、日本で博士課程に在籍してから年数が経過している場合には、D.E.A.をとばしてしまうことも可能です。修了年限の違い（フランスの maîtrise はバカロレア取得後四年で取得できる）や日本には D.E.A.制度がないことなどを理由に、学歴の同等性を主張するわけです。この場合は、受け入れ大学から個別

の許可を得ねばならないことは言うまでもありません。

こうした理屈もよく知らぬままに、インターネットでの情報収集から私の留学準備がはじまりました。（こんなことは強調してみせるのも傍ら痛いことは承知していますが、はじめてWWWにふれたときのNetscape Navigatorはまだバージョン２で、人文系のリソースなど数えるほどしかなかった私のような世代にとってはいちいちが新鮮だったのです。）

フランスの大学の登録手順はいくつかのパターンがあります。おおまかにいって、外国人学生向けのアドミッション・オフィスを通じて事務登録を行い、大学年度がはじまってから指導教官を決める場合、はじめに指導教官に接触しその許可を得てから書類を提出する場合の二つです。登録にあたって語学力の試験を課される場合もあり、このあたりは大学だけでなく学科によってもまちまちなようです。私の場合は、指導教授との接触が先で、語学力についてとくに試験は課されませんでした。その他に提出した書類は、各種学位の翻訳と語学力証明（D.A.L.F.）、簡単な研究計画が主なものです。

登録について付言すれば、フランスの大学には「学費」というものがなく、年間に大学に対して支払う額は「登録料」とそのほか雑費あわせて数万円程度ですみます。為替レートにもよりますが、家賃や食費、生活費などを考えても東京で下宿するよりは安あがりでしょう。この点はイギリスやアメリカへの留学との大きな違いです。

D.E.A.登録にいたる一連の経緯を振り返って、なによりも幸いだったのは、日本での指導教官である深沢克己先生が同じプロヴァンス大学で博士課程を経験していらっしゃったことでした。先生の以前からの知り合いであるフランス人研究者の方に、現在の指導教官であるジャン・ルイ・トリオ氏とロベール・イルベール氏を紹介していただき、また、深沢先生からも両教授に対して直接の紹介をいただけたことで、その後の研究準備や事務手続きは非常にスムーズでした。1999 年の前半にフランスに渡航した私は、こうした一連の事務手続きと、現地での史料調査、語学力の向上に夏休みまでの時期を費やしました。

D. E. A. の一年

エジプト都市史の専門家であるイルベール教授とブラック・アフリカのイスラーム研究を専門とするトリオ教授の両氏と相談の結果、トリオ氏が D.E.A.課程の指導教官を引き受けてくださることになりました。大学年度がはじまる十月第一週目に早速指導教官に面会した私は、オリエンテーションは十一月第一週で授業が始まるのはその後だと言われ面食らうことになります。翌年五月には学期が終わるというのに。いえいえ、自由な勉強時間が増えたと好意的に解釈することにしましょう。

D.E.A.（専門研究課程修了証書）課程とは、高等教育第三期課程の最初の一年間（場合により二年間かけることも可能）にあたる教育課程です。博士論文準備課程に進学する準備を行うことが主な目的ですが、実際には D.E.A.の取得をもって大学を離れる学生も少なくないようです。

授業への参加と D.E.A.論文の提出が評価の柱になりますが、両者の比率は学科によって変わってきます。私の在籍する「アフリカ・アラブ・トルコ世界」研究科には、学

科名通り三つのコースが含まれていて、たとえば私が属するアフリカコースでは論文がもっとも重要で、アラブ世界研究の学生は授業への参加が比較的重視されているといった具合です。

選択必修の授業として、学生の専攻によって四つから五つの授業・ゼミを受講することが必要です。私の場合には、学科全員が履修するテーマ講義、近現代史方法論概説（後期からは D.E.A.論文の中間報告）、オスマン史、アフリカ史の四つを選択しました。これらの講義はほぼ二週間おきに二、三時間をかけて進められ、毎回大学内外の研究者を招いて年間のテーマに関連した講義と議論が行われます。たとえば、「イスラーム世界における性差」「オスマン帝国の日常世界」といった具合です。各分野についての系統的な知識の習得というよりは、進行中の研究の現場をみて視野を広げることを目的とした講義編成になっています。

これらの選択必修講義に加えて、指導教官と相談の上、植民地史に関する連続セミナーとアラビア語の初級講座に出席することになりました。講義では論文などのリーディングリストが課されますが、分量は控えめです。議論への積極的な参加は歓迎されますが、毎回発言しないからといってパージされることもありません。ほとんどの講義に複数の教授・研究者が出席していますので、彼ら同士の議論で時間がすぎていくこともしばしばでした。

授業への参加もさることながら、D.E.A.論文が評価の重要な柱になります。ではそこで求められることはなにかというと、私の在籍した学科内の教官の間ですら必ずしも共通了解は無いようでした。博士論文につながる研究計画と小さなケーススタディを組み合わせた bâtard（折衷的）な論文、というのが私の指導教官の説明です。maîtrise の論文は完結した研究でなければならないのに対して、D.E.A.は研究課題を提示することに重きがおかれるようです。日本での経験と比較すると、分量は修士論文以上、議論の質は修士論文以下という感じではないかと思われます。毎週二つから三つの授業に出席しつつ、指導教官と定期的に面会して論文の準備を進め、口頭での中間報告をゼミ形式で行うという生活のリズムは、日本での修士論文の準備と大差はありません。D.E.A.論文の準備をすすめる時間が十分にあったおかげで、夏休み前の七月には無事口頭試問を終えることができました。論文提出直前に指導教官が体調を崩して入院してしまいずいぶんと焦ったことなども今思えば些細な挿話のように感じられます。

学科の様子

プロヴァンス大学の第三期課程で近現代史を専攻する場合、「地中海ヨーロッパの歴史・文化」研究科か「アフリカ・アラブ・トルコ世界」研究科のどちらかを選択することになります。それぞれが、歴史学を中心に民族学や人類学、イスラーム学などを包含した多分野学科の体裁をとっています。また、中世史と古代史については、「先史・考古学・古代中世の歴史・文化」と「ローマ研究」のふたつの研究科があります。近現代史を専攻する二者についていえば、兼任や重複も含めてそれぞれに 2−30 人の教官が配置されています。フランス史とそれ以外の地域を専攻する歴史研究者の勢力が拮抗しているというのは、フランスの地方大学では珍しいことなのではないかと思われます。

私は、日本では「西洋史学」専攻ですが、フランス旧植民地の歴史を専攻する学生の通例として、「アフリカ・アラブ・トルコ世界」研究科に所属することになったわけです。専攻で同期になった学生は、ほとんどが北アフリカと西アフリカからの留学生で、フランス人学生は少数派です。こういう環境ですから、教官達は外国人学生の扱いに慣れているようで、この点で余計なストレスを感じずに済んだことは幸運でした。

私の所属する学科に限らず、大学構内には意外なほど外国人学生が多いことも印象的です。これは、フランスが旧植民地を中心とした非ヨーロッパ諸国からの留学生受け入れに熱心なことと、EU 諸国内の交換留学プログラムが学生の移動を助けている、というふたつの側面から説明できるようです。キャンパス内で英語で会話をしている人の群れを見かけることも珍しくありません。とはいえ、カメルーン人とモロッコ人の同期の学生が"Hello! How are you ?" "Fine, thank you." と僕の目の前で話し出した時には何事かと思いましたが、彼らは英語の試験に備えて会話の練習をしていたのでした。

授業についていえば、方法論的に格別気取ったことをしようという雰囲気はなく、むしろ個々の研究報告の具体性に興味をひかれることが多かったように思われます。たとえば、C教授がフェルナン・ブローデルを得々として朗読した翌週にはG教授がマルク・ブロックを称揚してみせる「方法論概説」の授業には、幾多の興味深い情報が含まれていたとはいえ、思考の根幹を揺さぶられるような発見はありませんでした。こうした感想は、歴史以外の分野を専攻する日本人学生たちと話しても共通したものであるようです。

知り合いになった学生たちや研究者から私が一年間浴びせられつづけた質問は、なぜ日本人が植民地アルジェリア史を研究するのか？というものでした。この問いに真剣に答えることはもちろん簡単ではありません。しかし彼らが求めている答えはそれほど深いものではなく、ただ単に日本人が珍しいからこういう質問をしてくる。同じ研究をアメリカ人がしていても誰も不思議がりはしないのですから、極東からの学生はどこかで珍獣扱いなのです。

もちろん、色眼鏡を外して当たり前に遇してくれる相手はいくらも見つかります。ところが、そうした視野の広い大学人と話をすると、今度は彼らの学識と教養の深さに驚かされ、読書の範囲を狭めてヨコのものをタテにすることに汲々としてきたこれまでを思いだし、忸怩たらざることを得ない。ふたつの体験の間の落差は思ったよりも激しく、気の落ち込むこともまた鼓舞されることもしばしばです。こうした両様の刺激を受けつつ自由に書物と史料に触れることができるところに、今さら言うまでもないことながら、留学の意味があるのでしょう。

地中海人文研究所

大学キャンパスは、エクスアンプロヴァンス旧市街から十分ほど歩いた丘陵にあります。そのすぐ隣には国立文書館海外部門分館があり、これらと、キャンパスからバスに乗って十分ほどの所にある地中海人文学研究所（Maison Méditerranéenne des Sciences de l'Homme）の三カ所が、私の主な仕事場です。地域自治体の予算援助で近年新築された地中海人文学研究所は、大学と CNRS の共同利用研究・教育機関で、歴史学、人類学、

民族学、地理学、考古学の各分野の研究が行われています。

白壁の低層建築の館内には、図書室、食堂、研究者の個人研究室以外に、大小の集会室と教室があり、各専攻の第三期課程の講義以外に、ほぼ毎日のように大小の研究集会やシンポジウムが開催されています。これらのプログラムの予定はエントランスに毎日掲示され、他専攻の学生、研究者が自由に参加しやすい空気が流れている気持ちのよい建物です。たとえばここで私は、マルセイユの E.H.E.S.S.との協力で開催された植民地史をめぐる連続セミナーに出席し、人類学者による植民地社会の理解と、歴史学との相補の可能性について普段にない刺激を受けることができました。

こうした研究集会は、一回限りのものとして終わるものばかりではなく、しばしば出版を目的として行われます。研究成果の公刊が困難さを増すばかりのフランスでは、こうした共同執筆による出版が増加する傾向にあるようです。そこに含まれる個別研究には興味深いものも多いのですが、書誌情報から発見することが困難なのは残念なことです。

こうした研究所の図書室と大学図書館、史料館の図書コレクションが二次文献の主な入手先です。プロヴァンス大学図書館はフランス植民地史に関連する文献の集積センターとして指定を受けているため、この分野に関する限り不自由をすることはまずないのですが、その他の分野の人文科学書を探そうとすると、状況はお寒い限りです。なかでも英語の本の所蔵は非常に貧しく、この点に関して言えば東京の一連の大学図書館群とは比較するべくもありません。

これに関連していえば、英語圏の研究に対するフランス人学生の関心の薄さも強調しておきたいと思います。もちろん教授、研究者になると話は逆になり、特に植民地史の若い研究者達は英語圏の、いわゆる「アングロ・サクソンの」議論をさかんに取り入れようとしているようです。とはいえ、彼らの提案する比較や援用は、ときに素朴な借用にも見え、比較の可能性についての予備的な反省が不足しているように思われることも無いではありませんが。

史料館そのほか

国立文書館海外部門分館は、アルジェリアの独立後に植民地から引き上げられた公文書がエクスアンプロヴァンスに留め置かれたことに起源を持ち、1980 年代以降パリからも多くの史料を受け入れ、アルジェリアだけでなくフランスの旧植民地一般に関する史料を収蔵する集積地になっています。閲覧室は座席百席程度のこぢんまりとした施設で、パリの国立文書館（C.A.R.A.N.）のような巨大な建物とはずいぶん雰囲気が違います。ですから、通い詰めている研究者、職員はたいてい顔見知りになっています。

ここに通う日々の中ではじめに目を留めたのが、閲覧机の大半を占領している老人たちの姿でした。これほど多くのベテラン研究者が史料との飽くなき対話をつづけているのかと思えばさにあらず、しばしば夫婦連れで館内を闊歩する彼らの正体は、いわゆる「歴史」と「記憶」の関わりをめぐる議論のなかでかならずといっていいほど言及されるアマチュアのジェネアロジスト（系図研究者）達でした。近年フランスでは、自分の家系を調査することがちょっとした流行になっていて、書店にいけばいくつものガイド

ブックが棚に並べられています。エクスの史料館でも毎年利用者が増えつづけているのは、彼らの存在によるところが大きいそうです。史料館内の待合室などで、俺は先月十七世紀まで家系を遡ったのだが君はどうだい、などと語り合っているジェネアロジスト達を観察するのは、ちょっとした民族誌体験と言えなくもありません。

植民地に関わる近現代史は、いうまでもないことですが、記憶と歴史の境界があってないような研究分野です。あるいは、最近の用語法を借りていえば、歴史＝記憶 histoire-mémoire から歴史を問題化する営為 histoire-problème を独立させることが未だ困難な分野だとも言えるでしょう。1962 年という年はアルジェリア人にとっては独立を記念する年ですが、ピエノワール（かつてアルジェリアに住んでいたヨーロッパ人、彼らはいまでも自分たちのことを「アルジェリア人」と呼びます！）にとっては強いられた「帰還 rapatriement」を意味します。そこでは、相容れない記憶が交わることなくそれぞれの居場所を求めているわけです。たとえば「アルジェリア歴史文献センター Centre de Documentation sur l'Histoire de l'Algérie」に赴けば、その入り口には第二次世界大戦の北アフリカ戦線で活躍し、戦後はアルジェリアをフランス領として残すことを主張した軍人ジュアン元帥の石像が建っていている。閲覧机で本をめくっていればそこにはピエノワールの男達が入れ代わり立ち代わりやってきては、どこの生まれだい、などと「われわれのアルジェリア」の記憶を交換し合う場面を目にすることになります。またある日「パリ・アルジェリア文化センター Centre Culturel Algérien à Paris」に赴けば、入り口にはブーテフリカ現アルジェリア大統領の写真が掲げられ、図書室ではアラビア語とフランス語の混ざった電話や挨拶が取り交わされている。どちらの施設に出かけても珍しがられてそこそこの対応を受けますけれど、こんな主題に特定のアンガジュマンなしに取り組もうという私の研究は、いったいどこにつながっていくのか、迷いが消えることはしばらくなさそうです。この暫定的な留学報告が最終版になるころには明かりが見えてくることを願いつつ、筆を置きたいと思います。